

平成26年度 春季 学生チャレンジ制度 認定企画一覧

No.	団体名	人数	企画タイトル	企画目的概要
1	考古学研究会	6	甲斐の古道 ～鎌倉街道古き文化を探る～	<p>考古学研究会では、平成24年度及び25年度に認定を受けた学生チャレンジ制度を活用し、青梅街道と秩父往還の街道に関する調査を行った。これらの調査を通じて、この2つの古道の役割がどれほど重要なものであったかを知ることができた。しかし、山梨県内には、この2つの古道以外にも注目すべき古道がいくつか存在する。中でも鎌倉街道は、甲斐と中央を結んだ中道、若彦路、鎌倉街道の3つの古道の中で、記録上最も古い時代に登場した古道であり、7世紀の律令制度の整備によって交通制度も制定されている。また、鎌倉時代には、甲斐の政治の中心地であった石和が鎌倉街道の起点であると考えられることから、古道調査を行っている考古学研究会が調べるべき重要な古道と判断した。そこで、今年度の学生チャレンジ制度に応募したものである。</p> <p>具体的には、山梨県教育委員会の報告書（「山梨県歴史の道調査報告書第六集 鎌倉街道（御坂路）」）などの文献をもとに、調査対象の古道について理解を含め、現地調査を行った上で内容をまとめる。また、7月までに秩父街道の調査を行い、8月以降に鎌倉街道の調査を計画している。さらに、夏季期間に雁坂峠の登山調査も計画している。調査内容は、鎌倉街道沿いにある石造物や文化財、遺跡、神社、寺院、文化などの実測、及び地域住民からの聞き取り等である。</p>
2	込山 芳行 ゼミナール	23	南部藩再発見	<p>盛岡藩は、ときに南部藩とも呼ばれ、南北朝時代の頃より、明治維新によって盛岡藩が廃藩となるまで、長くその地を収めてきた。その南部氏のルーツが、現在の山梨県南部町にあることを知っている人は少ないのではないだろうか。この企画では、南部氏が花巻城で接待を受けた際に食べたことが起源とされる、岩手県名物のわんこそそばを多くの人たちに食べていただく。これらの活動を通じて、山梨県と岩手県の歴史を見つめ直すとともに、岩手県に親しみを感じていただき、山梨県と岩手県の新たな文化的交流のきっかけとなれば幸いである。</p> <p>伝統あるわんこそそばを多くの方々に経験していただくために、大きな規模のイベントにおいて「わんこそそば大会」を開催する予定である。現在の考えとしては、10月下旬に開催される樹徳祭の野外ステージを利用して行う予定である。内容としては、当日は本場花巻市のわんこそそば専属の行司（佐藤忠明氏）をお招きし、多くの市民や学生たちに参加してもらう。現在、樹徳祭の中で本企画が実行できるかどうかは協議中である。仮に不可能な場合は、そば店などと連携して実施する案も検討している。また、南部藩発祥の地・先祖ともいわれている南部町と提携して、南部町公民館においても同様の「わんこそそば大会」を開催する予定である。</p>
3	さかおり 浪漫倶楽部	13	さかおり 浪漫倶楽部・・・地域 応援隊	<p>本学の所在地である酒折近辺には、「さかおり倶楽部」という団体があり、地域活性化を目的として精力的な活動を行っている。今回、「さかおり倶楽部」の方々と交流する機会を得た中で、現在、「さかおり倶楽部」では本学の一部のスポーツ系クラブや学生会との交流しかなく、それ以外の一般学生への浸透度が低いという現実を知った。</p> <p>元来、酒折は学生の街であり、この街を学生自身が盛り上げていくことが必要であると我々は考える。そのためにも、酒折駅を利用する学生や大学周辺で生活をしている学生を取り込み、地域の方々との連携によって更に大きな活動へと発展させ、地域活性の一翼を本学の学生として担うことが目的である。</p> <p>既に、「さかおり倶楽部」としては、「酒折ゴミゼロキャンペーン」や「酒折音楽祭」を中心とした活動を行っている。また、アルテア七夕まつりのサポートや酒折ワインフェスタ等の大学内外のイベントにも参加している。これらの活動に、多くの本学の学生が積極的に参加することによって、新たなシナジーが生まれ、地域活性化を促進することになる。</p> <p>今回我々の提案で、「酒折朝市(毎月1回開催予定)」を新規に企画した。学生の街としての発展は当然のことながら、休日にも地域の人たちが集まるような街になるように大きなイベントに成長させていきたいと考えている。また、これらの活動だけでなく、我々学生による柔軟な提案で新しいイベントを企画し、周知を図ることによって、今後も酒折の地が学生の街として更に発展していくことを確信している。</p>
4	江藤 俊昭 ゼミナール 市民教育班	11	高校生がデザインする 政治～18歳選挙権が 切り拓く将来～	<p>近年、若者の選挙離れが社会問題となっている。選挙の投票率は現在低下傾向にあり、特に20代の投票率は、全年齢と比べて低く問題視されている。その原因として、一票の価値の重さを理解しておらず、他人任せになってしまっているという現状がある。国や地方の政治の主導権を選出するのが選挙であり、自分たちの生活に直接関わってくるという認識を持つことが若者には重要である。</p> <p>そのような中、平成26年5月9日に衆議院本会議において、憲法改正手続きを定めた国民投票の改正案が採決された。この改正案により、投票年齢が「20歳以上」から「18歳以上」に引き下げられ、改正法施行4年後に現実のものとなる。投票年齢が18歳以上になるにあたって、高校3年生が選挙権を得ることになるため、高校生へのシティズンシップ教育（市民教育）を行いたいと考える。目的として、政治参加における政党の理解、マニフェストの理解、政治的判断力の向上に繋がるシティズンシップ教育（市民教育）を行いたい。また、市民教育を通して、高校生の政治的関心の向上、これからの投票率の向上を目指し、持続的な若者の政治参加に繋がればと思う。以上のことから、「高校生がデザインする政治」～18歳選挙権が切り拓く将来～をテーマとして高校生に対して出前授業を行い、併せて模擬投票も体験してもらう。また、山梨県選挙管理委員会へのヒアリング調査、他大学とのシティズンシップ教育合同調査や交流会なども実施していく。</p>
5	数住 伸一 ゼミナール	12	「ふらっと案内」が富士五湖を救う～“外国人観光客にやさしい” 情報発信～	<p>最近の富士五湖地域では、富士山世界遺産登録の関係で今まで以上に外国人観光客の数が増えてきていることが分かっているが、予想以上の伸び率に地元のインフラや情報整備が追いついていないようである。グローバル化が進む昨今、観光業の国際化はこれからの富士五湖にとって欠かせない事案である。しかし、彼らに対するのサイクル貸出、近くの観光スポットや施設紹介、そこに至るまでの交通手段などがどこに書いてあるのかは、今現在、言語的にも検索の仕方からも、大変分かりづらく、再び訪れたいと思わせる上で大きな障害となっている。今回の企画では、外国人観光客に対して分かりやすい情報、環境を整備するというアプローチから、結果として、私たちの地元である富士五湖地域全体の連携と活性化を図っていくことを主たる目的とする。以下の2つは、その改善に向けて主な活動である。</p> <p>①『ふらっと案内』・・・このアプリを主な軸として利用していく。これは、スマートフォンにも対応した無料携帯アプリで、今自分がいる位置から近い順に、食事処や宿泊施設、観光スポットをひとつひとつ表示して並べてくれるものである。今回の企画案では、このアプリを主な軸として使い、バラバラに展開している富士五湖の情報を実際に訪れ調査しながら1つにまとめるとともに、その過程を通して地元企業や自治体との強固な連携を図っていく。また、本学の学生が取り組んでいることをアプリの中でアピールすることによって、本学の活動をより多くの人に知ってもらおうと企画している。周知の方法としては、アプリの紹介が書かれたQRコード付きポップを、外国人観光客が集まる施設などに置かせてもらい、アプリの使用を勧めてもらう。</p> <p>②『多言語への対応』・・・ふらっと案内の中で表示される言語を私たち自身で訳し、日本語以外にも3ヶ国語（英語、中国語、韓国語）を新しく導入する。</p>

No.	団体名	人数	企画タイトル	企画目的概要
6	立石 貴子 ゼミナール	13	「平成の富嶽三十六景」を絵葉書にして、県内観光施設で販売する	<p>学部横断型副専攻が始まって2年目に入り、1期生となる私たち3年生として、他の3本のプログラムとのコラボレーションができないかを考えた。アートマネジメントプログラムにおいて、多摩美術大学の方たちで作成された『平成の富嶽三十六景』を、観光ホスピタリティプログラムの立石ゼミで、絵葉書という商品にし、山梨県内の観光施設での販売を行う企画を立案することにした。その背景には、キャンパスセンターにただ飾っておくだけの「アート」ではもったいない！と感じたところから始まった。すなわち、アートをアートとしてのみではなく、身近に感じてもらえる商品にすることで、多くの方たちに興味をもってもらおう。また、アートとしての『平成の富嶽三十六景』を周知することができる。一般的に認識されている本学のイメージとこのアートのギャップを楽しんでもらう。また、動き出して2年の学部横断型副専攻を同時に周知することができるのではないかと考えた。</p> <p>また、この企画で、ただ単に商品を作成し、店舗に任せるのではなく、商品企画、販売戦略などまで一連の物と人と金の流れもこの企画で体得したいと考えている。さらに、自分たちでパッケージを考え、販路を開拓し、店頭のプロPOP作成や販売の手伝いをゼミ生で行う計画でいるため、県内観光施設との直接的な交流が図れると考える。これは、観光ホスピタリティプログラムとしてただ単に観光施設を訪れ、観光客としての目線に立つだけではなく、提供側の現状を肌身で感じることもできるのではないだろうか。現代ビジネス学部・経営情報学部の学生として、大学で学んできた知識を基に、商品をどのような視点で売っていくのか、売っていけば売れるのか、または、売れずに残るのか、また、観光客がどのような視点で商品を選んでいるのか、選ばないのかを同時に学べると思い、この企画を応募することにした。</p>
7	Jump	5	いずみそばPR プロジェクト	<p>山梨県中小企業団体中央会が企画する学生会社診断では、「企業及び業界団体の問題点及びその解決方法について、学生が検討・提案することにより、県内企業等の実態や問題について理解させることを目的とする。」以上の内容のもとで学生と中小企業のコーディネイトが図られる。今回私たちが担当させていただく中小企業は、「一般社団法人いずみそば組合」である。私たちは、学生会社診断に参加したうえで、学生独自の視点を活かしたいいずみそばのPRを行いたいと考える。学生は、実際に企業が抱える問題点の解決を図る協力をし、企業には学生が学ぶ場を提供していただくことでお互いに成長することを目指す。</p> <p>現在、「一般社団法人いずみそば組合」が抱える問題の1つに以下の点が挙がる。<北杜市が、北杜市大泉地域で生産した「そば」の宣伝等を行って欲しいため、「そば処いずみ」の運営を委託しているがその役割を果たしきれていない。> 私たちは、この問題点に着目して「いずみそば」の宣伝を行いたいと考える。具体的な方法は2点ある。1つは、インターネットを利用した情報発信により、山梨県外からの観光客や若者世代の集客率を向上させる。2つ目は、「いずみそば」を利用したそば製品の開発と販売によって、「そば処いずみ」へ来店する動機づけを行う。そのために、「そば処いずみ」におけるインターンシップを実施して、企業が抱えるより具体的な問題点と改善点や「そば処いずみ」とその周辺環境が持つセールスポイントを調査する。また、週に1回程度の現地訪問を行うことにより、「いずみそば組合」が抱えるより根本的な問題に迫り、従業員の思いを引き出したうえでの製品開発と情報発信を行いたいと考える。</p>
8	健康栄養学部 管理栄養学科 3年生	49	目指せトップアスリートへの食事	<p>健康寿命を全うするためには、栄養に加えて運動や休養が欠かせないことをこれまで学習してきた。その中で、スポーツと栄養について興味を持ち、昨年の学生チャレンジ制度において、運動部の高校生を対象とした栄養教室を開催した。トップアスリートを目指す選手の成績向上には、日頃のトレーニングと共に、栄養面でのサポートが重要であることを学んだ。</p> <p>しかし、栄養面でどのようなサポートが求められるかは、それぞれの競技において異なる。そのため、国内外で活動するトップアスリートの中には、競技生活のサポートチームに管理栄養士を加えている選手もあり、メディアで取り上げられていることもある。</p> <p>私たち健康栄養学部3年生は、スポーツ選手が多く所属する本学の資源を活かし、スポーツ栄養の実際を知りたいと考えた。その中で、本学の中でも全国的に有名な陸上競技部の選手の食生活について学習する機会を得た。そこで、2年間で学んだ知識を基に、陸上競技部の選手における食生活の状況・栄養状態を把握し、トップアスリートを目指す選手の食物・栄養の知識を理解し、故障予防に繋がる食生活・献立を考えることを目的に活動を行うことにした。また、これまでに学んだ知識及び今回の活動を通して得られた知識を、選手たちに講座や資料媒体で還元する機会を設けていく。このように、陸上競技部の選手に即した食事・栄養を知るための栄養調査をはじめとした調査・研究を行うため、学生チャレンジ制度に応募することにした。</p>
9	青木 慎悟 ゼミナール	4	SNSを用いたソフト食の情報発信とコミュニケーション作り	<p>私たちは、昨年12月からソフト食の研究を始めてきた。ソフト食とは、ミキサー食の前の段階の食形態で、柔らかいがしっかり食べ物の形がある、見た目もきちんとおいしそうな食事のことである。ソフト食には多くの利点があるが、一般の方まで情報が行き届いていないのが現状である。</p> <p>具体的な取り組みとしては、本などを参考にしながら、肉じゃが・ハンバーグ・豚汁・タラのテリーヌなどをソフト食にした。増粘剤は、スペラカーゼ、ソフティア2GEL、ソフティアUを使用した。しかし、どれも80℃以上の再加熱をしないと固まらないため時間がかかったり、微妙な水加減でミキサーが回らず、固形物が残りやすい。または、増粘剤量が少なかったり、加熱が不十分だったりして固まらないなどの問題点が多かった。そこで、増粘剤（まとめるこeasy）に変えて、抹茶プリン・刺身・和風ハンバーグを作ってみたところ、この増粘剤は、再加熱をしなくても食材と混ぜるだけで固まるため、時間短縮ができ、生の食材でもそのまま固めることができる等の利点があることが分かった。以上の研究より、増粘剤（まとめるこeasy）で簡単にソフト食が作れることが分かった。</p> <p>そこで本企画では、これまでの活動を踏まえて、自分で簡単にできるソフト食を多くの人に知ってもらうために、SNS（Facebookやtwitter）で情報発信し、施設や病院でも手軽に使用できるようにしていくことが目的である。今後は、これまで行ってきたソフト食の調理を継続的に行い、普通食、介護食、嚥下食、ソフト食、きざみ食、ミキサー食の段階を追って調理し、10月からSNSに更新していく。また、ブログの更新状況は随時、SNS（Facebookやtwitter）で報告し、いいね！やリツイートを通じて、多くの人々の目に留まるようにする。さらに、地域に沿った郷土食や行事食も取り入れようと考えている。</p>
10	伊藤 美輝 ゼミナール 2年生	14	子どもたちの造形環境の提案～児童館における造形ワークショップの実践～	<p>子どもたちが造形に取り組むことのできる機会は、造形に関する授業時数の減少及び子育て家庭の状況や環境から見ても、決して豊かとはいえない。山梨県立美術館における「つくろうあそぼう造形広場」への参加者は、毎回100名を超え、山梨県内から来場する。「毎回参加したいが、遠方のため、もう少し近くでこのような場所があればありがたい」という声を聞くことがある。</p> <p>そこで伊藤ゼミにおいて、各地域にある児童館において、造形のワークショップを行うための造形環境の要素を調査するとともに、ワークショップモデルを作るため、実際にワークショップを実施して具体的な提案を行いたい。なお、今回のワークショップは、笛吹市御坂児童センターで実施する。</p> <p>具体的には、準備段階として、造形活動に含まれるエレメントの調査、造形活動に含まれる育ちについての考察、造形活動テーマの決定と道具及び素材の準備などを行う。その後、ワークショップ会場となる笛吹市御坂児童センターとの打合せを経て、10月下旬及び11月上旬の平日の放課後の時間帯に、計4回のワークショップを実施する。さらに、活動の評価・考察を行い、報告書を作成し、来年2月18日開催予定の保育科卒業レポート発表会において成果を発表する。</p>